

緋弾のアリア—交錯する者達

孤独な白狼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東京武偵高校、そこは凶悪化する犯罪に対抗するために新設された国家資格―通称「武偵」を育成する学校。これは里見 海斗（さとみ かいと）の周りで起こる様々な事が交錯する物語。▼感想への返信はいたしませんのでご了承ください。誤字脱字があれば感想でご指摘してくださいと助かります。▼注意▼文才皆無▼このお話は特に勢いで書いているので最終的にどう着地するか不明▼絵の気分転換なので不定期更新のうえ、失踪の可能性有り、などがダメな方はブラウザバックして下さい。それでもいいよ読んであげるといふ方は、どうぞごゆっくりして行って下さい。▼後、アンチ・ヘイトタグは念の為です。▼クロスオーバーは色々な作品を予定（というか全然決まっていな

(...)

目次

第1話	出会い、そして始まり	1
第2話	契約	14
第3話	手荒い歓迎	25

第1話 出会い、そして始まり

もうすぐ日が明けようかという頃。

あるニュータウン計画で建設中ビルの立ち並ぶまだ人気の無い町。

その中でも大きな企業が入る予定の10階建てのビルの5階。

まだ壁の出来ていない場所で、外を見ながら膝立ちの姿勢でバイポットを立てた狙撃銃を構え、スコープを覗いている黒髪の少年がいた。

「…ターゲット確認」

少年は無意識の内にそう小さく呟き、銃を持つ手に僅かに力が入る。

ターゲットというのは、この地域で極秘裏に行われるという武器の密輸現場に現れる、あるマフィアの幹部の1人のことだ。

今回はそいつを暗殺するのが少年の受けた依頼だ。

依頼者に貰った情報通りであれば恐らく後数分で予測する位置に顔を出すであろうターゲットを少年は狙撃する予定だ。

ちなみに少年が構えている銃は、アンチマテリアルライフルである、ヘカートIIだ。

ヘカートIIは遠くからでも戦車などの装甲版を貫通出来るだけの破壊力を備えてい

る。

更に少年が特殊な違法改造を施している為、通常のヘカートIIよりも最大射程が長くなっている。

(そういえば、今回の依頼もいつもと同じような内容だったけど…依頼者がいつもと違って詳しい情報をくれなかったな、どうしてだろうか?)

そんな余計な事を考えつつもトリガーガードにかけた指をトントンと動かしたりズムをとり、狙撃タイミングを計る。

(ここから狙撃ポイントまでの距離は約2000mあるかないか…こんなの大した距離じゃない、ヘカートIIが無改造だったとしても当てられる距離だ。こんなの丸めたゴミをゴミ箱に投げるのと大差ない)

「……フッ……チツ!!」

少年はターゲットを確認したのと同時に息を一瞬止めトリガーを引いた…。

いや、少年は悪寒を感じトリガーを引かずに舌打ちをしながらも両手でヘカートIIを持ち上げ、その方向に銃口をすばやく向け、勘で狙いをつけトリガーを引き…撃ち放つた。

すると、パァン!と凄まじい音や反動と共にヘカートIIから12.7×99mm NATO弾が銃口から吐き出されたが、途中で何かに当たり少年の直ぐ横にそれが着弾し

た。

少年はそれを碌に確認もせず、ヘカートIIのボルトを引き、すぐさま排莖させ次弾を薬室に装填し更に発砲する。

それがまた何かに当たり近くに着弾する。

「クソツッ！あの狸爺、俺はもう用済みってか?!次会ったら絶対殺してやる!!」

少年は咄嗟に理解した：今回の依頼は少年を消す為に仕組まれた罠だと。

そして今の状況は恐らく少年の殺害を依頼された同業者のスナイパーから攻撃を受けているという事。

「こんな所で殺られてたまるかよー」

少年は相手が撃ってきた銃弾に銃弾で弾く銃弾撃ちという技を使い着弾点を6・7回逸らし防いでいると、とうとうヘカートIIの弾が切れてしまった。

「くっー」

少年は直ぐに右手でレッグホルスターからM92Fという拳銃を取り出しつつ安全装置を解除し発砲、また銃弾撃ちで逸らしていると敵はそれをも利用した上でこちらに当たるように撃ってきた。

(跳弾射撃だど?!意外に高度な技を使ってくるな)

そんな事を考えつつも直撃しそうな銃弾は全てもう一度銃弾撃ちをして逸らす。

(弾の消費がやばいな…)

そんな事を思いながらも撃ちつつ、ヘカートⅡの空マガジンを左手で抜き新しいマガジンを装備する。

それが終わると同時にM92Fが弾切れを起こしホールドオープン状態になり致命的な隙が出来てしまった。

だが、絶好のチャンスだったにも係わらず相手からの銃弾が飛んで来なかった。

それは相手も弾切れを起こしたのだろう。

(このチャンスを逃すわけにはいかない！)

少年はM92Fをレッグホルスターへ仕舞い、ヘカートⅡを肩から提げ、建設中ビルから身を投げ出した。

途中で他の建設中ビルへと両腕に仕込んでいた特殊ワイヤーを交互に発射して引っ掛け、高速で巻き取るを何度も繰り返す事で空中を高速移動しつつ、再び飛んでくる銃弾を何とか紙一重でかわしながら敵狙撃手がいるであろう建設中ビルの5階に突入する。

「フウ…たどり着いた…敵は7階…2つ上か…」

少年は息を軽く整えてから階段を登る。

(こりゃあ階段から出た瞬間に狙われるな)

まず腰のポーチからスモークグレネードを取り出し安全ピンを抜き、敵がいる階に放り込むと同時に狙撃され何処かに弾かれてしまった。

実はそれも想定していた為、発砲と共に一気に飛び出しコンクリートが剥きだしの柱にもたれるように身を隠すと、敵からは死角な筈なのに再び発砲音が響いた。

またも悪寒を感じて直感を信じ、遮蔽物になりそうな別の柱に飛び込むと、先ほどまで少年の胴体があつた位置を寸分違わず跳弾した銃弾が通り過ぎた。

(…あぶねえ、まさか二重跳弾狙撃まで出来るとは思わなかつた。完全に見えてない筈なのに正確に狙つてきやがった。無理やりでも前に進んでホールドアップしないと。今はこいつを殺すわけにはいかない、誰に雇われたか聞くまでは…どうせあの爺だろうけどな)

少年はそこまで考えると同時に、遮蔽物から飛び出しつつヘカートIIの銃口を向け発砲する…ようなフェイントをかける。

「…あ」

敵がそれを見て反射的に撃つた銃弾は銃口から放たれるよりも前に最低限の動きだけで視線から逃れることで避け、一気に距離を詰め敵の後ろに回り込み、袖に隠していたナイフを首に当て拘束する。

「誰に雇われた…」

「依頼主の情報は言えませんが」

「ほう」

（この状況で言わないか。それにしても暗くて分かりにくいけど……こいつ女か？そして、あれ程の狙撃技術があるのに致命傷になる所には一発も撃ってこなかった。もしかして、こいつ……人を殺した事がないんじゃないか？解放して話を訊いてみるか）

少年が拘束を解き、ナイフを仕舞うと少女が戸惑いつつポツリと呟いた。

「殺さないんですか？」

「どうやら殺されずに解放された事に驚いているようだ。」

「何故殺す必要がある？」

「私はあなたを殺そうとした」

「お前の腕では俺を殺せないし、今のお前なら拘束しなくても話が聞けそうと判断した」
「……ッ！……」

少年が笑顔でそう言うとその少女は無表情なのに何故か少年には照れているようにも見えた。

「そうだ……俺の名前は里見 海斗（さとみ かいと）だ、お前の名前は？」

「……………レキです」

「レキが良い名前だな」

海斗達が自己紹介していると雰囲気を読めないやつらの足音が聞こえてきた。

「…ん？」

(この足音は…1階に何人か来たな)

「お前の仲間か？」

「違います」

「どうやらお前も依頼主クライアントに裏切られたみたいだな、これからどうするんだ？」

「それでも私は依頼主クライアントの元に戻るだけです」

「何？…俺を始末出来なかったんだ、お前殺されるぞ？それでも戻るのか？」

「はい」

「ふざけんな！お前はそれでも良いのかよ！」

「良いも悪いもありません。全ては風の導きです」

「そう言うなら俺がここでお前を殺してやる！」

海斗はレッグホルスターからM92Fを抜き、レキに銃口を向け撃ち放つ。

「ツ！…何故、外したのですか？あなたの腕ならこの距離で外すはずがありません」

そう、海斗が撃つた銃弾はレキには当たらず、直ぐ横を通りその後ろの壁にめり込んでいた。

「ここでお前はターゲットだった俺に撃たれて死んだ。今のお前は自由だ、後は好きに

生きろ」

「自由、と言われても私にはよく分かりません…」

「分からないって……クソッ！」

海斗は咄嗟にレキを抱え遮蔽物に向かって飛び込み、身を隠すとパパパッ！と銃弾の嵐が階段の方から二人のいる階に殺到した。

海斗は会話に夢中で忘れていたが階段から上がって来ていたやつらがこの階に到達すると同時に発砲してきたのだ。

(ここにはレキも居るのが分かっている筈なのに撃ってきたという事は……やはりレキも俺と同じように罠に嵌められたって推測は当たりみたいだな)

「どうするのですか？」

「そっち残弾は？俺はメインもサブも残りマガジンずつだな」

「残弾はありません」

「そっか……なら一先ずこれ持つとけ」

海斗はレッグホルスターから弾切れだったM92Fを抜きマガジンを交換して、レキへ手渡す。

「なぜ、私に渡すのですか？」

「ん？この状況を生き延びる為には必要だろ？」

「そう言う事ではありません。この状況では逃げきれませんよ?」

「それはどうかな? まあ俺に任せろって、この程度の状況なら何とか出来る。もうちよっと寄ってくれ」

そう言いつつ海斗はレキが近寄ってきた所を予備の特殊ワイヤーで自分と繋ぎ、左手でレキの細い腰に手を回し脇に抱える。

(おつと、…軽いな。ちゃんと食べてるのか?)

「ツ?!?!」

(えいく可愛い反応するなく。…まあ今は変に動かれるよりはいいか)

抱える際何故かレキは抵抗せず…というか咄嗟のことでレキは思考が追いつかず、追いついてもこれまで異性とかかわる事自体少なかったレキは異性との接触に無意識のうちドキドキしたことで体に力が入ってしまい動ける状態ではなかっただけなので。

(さて、あく言ったけどどう逃げるか…弾がもつとあれば全員皆殺しにして逃げれば良かったんだけど…これ以上逃げ方を迷っている暇はない!)

その考えに至ると同時、腰のポーチから攻撃型手榴弾を取り出しその安全ピンを抜き、まだ敵が潜んでいるであろう階段の踊り場の方へと投げる。

そしてレキを脇に抱えた状態で壁がなく外が見えている場所まで走り…そこから飛

び降りる瞬間、向かいのビルの屋上で何かが光った。

「マズッ！」

反射的にレキを庇うように体を反らしかわすが、7階から飛び降りるつもりだった為、体勢を崩した状態で一気に外へと飛び出した。

背中を冷汗がドツと流れるがすぐさま右手から特殊ワイヤーを飛ばしそれを別のビルに引つ掛ける。

もう片方の手が使えない為、それを支点に振り子の要領で別のビルへと飛び移ろうとするが、ビルに飛び込む寸前でまた光った。

この時海斗は両手が塞がっており回避は不可能だったが、いつの間にか復活したレキがM92Fで銃弾^{ビリヤード}撃ちをして防いでくれ、何とか無事に別のビルへとたどり着けた。

「ナイス、レキ」

「……」

(どうも褒められ慣れてないみたいだな、一見無表情に見えるけど何となく照れているようにも見える。ほんとこの子一々すごく可愛い反応するなく弄りがいがある)。

そんな余計な事を考えている間もワイヤーを使いビルからビルへと渡っていき、大きな森のような公園にたどり着く頃には全ての追手を振り切っていた。

「……」まで来ればもう大丈夫だな」

海斗は周りを確認し追手がいないのを確認出来たのでさっさと二人を繋いでいるワイヤーを解き離れる。

その時に普段から無表情なレキには珍しく極僅かに残念そうな表情をしていたのが海斗はちようど死角になっていて気がつかなかった。

「な？逃げ切れたろ？」

「こんな方法で本当に逃げ切れるとは思ってもみませんでした」

レキが呆れ顔でそう言うってくるが無視する。

「ここまですればお前も大丈夫だろ？お前はもう自由だ、後は好きに生きな、じゃあな」
そう言い海斗はその場を去ろうと歩き出したが：何故か自分以外の足音がもう一つ聞こえた。

その足音の正体はテトテトと何故か自分の後をついてくるレキだった。

「…何で付いてくる？」

「私はこれから、あなたに仕えます。あなたは私の銃をあなたの武力として、私の身体はあなたの所有物として、自由にお使い下さい」

「……ちよつと待て！付いてくるって話からどうしてそうなる?!」

「ウルス族には強い力を持った人を媚に入れるという掟があり、あなたが私との戦いで勝利したからです。それに風は、あなただと言っている」

(マジか…ウルス族的には私に勝ったんだから責任とって結婚してってことかよ…)
「それは、ウルス族流にのつとて私と結婚してってことであってるか?」

レキがコクコクと小さく頷き肯定する。

「はい。それに異性とは話し合いで手に入れるものではなく、奪うものですから」
「理由は分かった。悪いが…行き成り結婚だけは止めてくれ」

海斗が結婚だけは何としてでも断ろうとするとレキはドラグノフ狙撃銃の銃口を海斗に向けた。

「ちよつと待て!お互い今日知り合ったばかりなんだ、せめて恋人から始めさせてくれってことだ」

「……」

海斗の妥協案を聞き、納得したレキは無言でドラグノフを下ろした。

「俺もレキみたいに可愛い子となら嫌ではないけど、順を追ってまずは恋人としてお互いの事を知っていいこうよ。所有物とかじゃなくてさ」

「……」

レキの顔をが少し紅くなっているような気がしつつも海斗は続きを話す。

「まあその時には俺よりもいいやつがいるかもしれないし、そっちの気が変わるかもしれないしな」

海斗が言った事を考えているのか少し俯き、結論が出たのか顔を上げた。

「…分かりました。それでは結婚を前提にまずは恋人になるということで」

「それじゃあ、これからよろしく。レキ」

「はい。こちらこそよろしくお願います。里見さん」

こうして俺達2人は組織を抜けたその日、恋人同士となった。

第2話 契約

朝日が昇り始めた頃。

色々あつて、これからは行動を共にする事になった海斗とレキ。

2人はまず、活動拠点を得るため、大きな公園を抜け、隣町のまだ人気のない道を歩いていった。

(俺達の部屋は元々組織が用意した物だったから部屋に戻るのは論外：荷物は諦めるしかないな：ああ：俺のグラビア写真集、グッバイ)

海斗が意気消沈しつつも歩いていると、他の店はまだシャツターが下りているにも係わらず、喫茶店のような建物だけが開店しているのか明かりが付いており、そのテラスには2人ほど人がいた。

1人はその喫茶店の店員なのか、長い黒髪の女性がフリルの多めな可愛らしいデザインの制服を着て、お盆を持って立っていた。

もう1人は英国紳士と言えらるだろう顔つきのイケメンな男が椅子に座り、新聞を広げていた。

海斗とレキは自分達が持っているヘカートIIやドラグノフなどの狙撃銃を見えない

ように持ち直しつつその喫茶店の横を通り過ぎた。

「もうそろそろ逢える頃だろうと推理してたよ、君達に話たい事があるんだ。聞いてもらえないかな？」

テーブルに新聞を置いた英国紳士は通り過ぎようとしていた2人に視線を向けそう言った。

「ハア……」

海斗は呆れてため息を付きながらもゆっくりと英国紳士の方へと向き直り、レッグホルスターからM92Fを抜き銃口を向けた。

レキはこの時、海斗の瞳の色がいつの間にか元の黒色からルビーのような紅い色に変わっている事に気が付いたが、一先ずは事の成り行きを見守る事にした。

「ん？何のつもりかな？」

「バレないと思ったのか？」

海斗はそう言い放つと同時に警告もなしにM92Fを撃ち放った。

パンツという音と共に銃口から勢いよく撃ち出された銃弾に英国紳士は眉間を貫かれ、驚いた表情のまま椅子ごと倒れていった。

「俺達を試すつもりか知らんが、こんな人形で俺達と話をしようなんて思っていないんだろ？さっさと出て来い、中に居るのは分かってる」

海斗が店内に向かつてそう声をかけると、パチパチと拍手をしながらさつき撃ち殺した筈の英国紳士とまったく同じ顔をした男が出てきた。

「いや、すまない。推理して分かっていたとはいえ、話す前に君達の力を直に見ておきたくてね。試すようなマネをして悪かった」

(こいつ…弱く見えるように振舞ってるけど…強いな。まったくスキがない)

海斗はその男から発せられる言葉の端々から、名状し難いカリスマ性のようなものを敏感に感じ取り、警戒レベルを大幅に引き上げていた。

「もう、それはいい。推理していた、というのは？」

「卓越した推理は自ずと予知に近付いていくものだ。僕はそれを『コグニ条理予知』と呼んでい
るがね。つまり僕は君達があの組織を抜けてここを通ることを予め知っていたのだ。
いきなり君に撃たれるところまで全て僕には推理できていたんだよ」

「なるほどね」

(にわかには信じられないが、嘘でもなさそうだ)

「そうだ、まだ自己紹介をしていなかった。僕は…」

「おっと、その前に…あんたの仲間、そこで店員の真似をしている女性以外にもいるだろ
？店内に潜んでるのは分かってるんだ」

海斗がそう言うと、女性店員は僅かに驚きつつ、何故ばれたのか？といった視線を海

斗に向け、店内に潜んでいる者の方からも僅かに驚いた気配が伝わってきた。

「ああ、そうだったね。パトラくんこっちに來てもらえるかな？」

英国紳士が店内に向かつて声をかけると店内から、金銀財宝でその身を飾り、水着のように露出度の高い服を着た半裸同然の女性が現れた。

（うわあゝ…あれ、ただ布を巻いてるだけなのか、露出狂だな。あの格好をレキがしても…いや、アリだな）

レキにはこの時、海斗がパトラを見てにやけたように見え、ある事を考えていた。

（何故、こんなにも胸がモヤモヤするのでしょうか？）

レキには結局その答えが分からず、自分でも気が付かないうちにムツとした視線を海斗に向けていたが、向けられた本人もま海斗ったく気が付いていなかった。

そして、パトラと呼ばれた少女は英国紳士の隣までやって來ると海斗に自分の格好が若干引かれて露出狂扱いされているとはいざ知らず、話し始めた。

「教授プロフェッサーよ、こやつを本当に加えるのか？確かに私の造った砂人形や気配を消していた妾を一発で見破ったのは多少評価してやってもよいのぢやが…こんなひよろい奴使えるのかのう？」

海斗はパトラと呼ばれた少女の言葉を聞き、さつき自分が撃つた男が倒れているはずの場所を横目で確認すると、ちょうど体が砂に還っていく所だった。

(砂人形…あいつ、超能力者か)

「こう見えて、彼にはある能力があるかなね。彼が本気になれば、いくらパトラ君であっても苦戦するレベルだよ」

「それ程とは見えんのぢやが…プロフェッショナル教授がそう言うなら今は黙っておくかのう」

明らかに「今は」の部分だけ強調してパトラは不服そうに男の後ろに下がっていった。「へえー流石に俺の事は全て調べてるってわけか。でも、俺が能力を持つてるって情報は完全に抹消したはずんだけど、どうやって調べた？それも推理か？」

「いや、これは推理ではないよ。簡単なことだ、抹消された記録を復元したまでさ、イ・ウーには優秀な人材がいるからね。例えば、子供の頃に特殊なウィルスを使うことで治療力や運動能力など、さまざまな能力を付加させることで最強の兵士を作るといふ実験…その成功例が君だという事もね」

「……」

(どうやら、本当に俺の情報を調べてきてるみたいだな、それに今の所は俺に危害を加えるつもりもなさそうだし、こいつとは話せそうだな)

そう判断した海斗は警戒だけは怠らず、M92Fを一先ずレッグホルスターに戻した。

「それでは、仕切り直して自己紹介といこう、と言っても君は僕のこととは知ってるだろ

う。こう思うことは決して傲慢ではないことを理解してほしい。なにせ、僕という男は、嫌というほど本や映画で取り上げられているのだからね。そつちには僕を紹介してくれそうな人が……いや、ウルス族との交渉に行った時にレキ君とは面識があつたね。それでも改めて——初めまして。僕は、シャーロック・ホームズだ」

(シャーロック・ホームズだと?…なるほど、それで推理か)

海斗がレキに確認の意味を込めて視線を向けるとレキは小さくコクリと頷いた。

「はい。その人はシャーロック・ホームズ1世です」

「ありがとレキ。それで、そのホームズさんが俺達に何の用だ?」

視線の意味を悟ってくれたレキに礼を言いつつ、シャーロックには先程のように回りにくどい言い方をされないよう海斗は直球で言った。

「ふむ、率直に言おう。君をイ・ウーにスカウトしたい」

「スカウト? あんたなら俺がどう答えるか推理で分かるんじゃないのか?」

「僕の『条理予知』にも例外があつたようだね。未来が推理出来ないのは海斗君で2人目だ。だから、君の事が気になつたんだ」

(未来予知も万能じゃないわけか。それに2人目? ということは俺以外にもいるわけか。そいつの事も気にはなるが今考えることじゃない…それにしても、意味は違ふと分かつていても男に「君が気になる」とか言われると寒気がするな)

「イ・ウーの目的は？」

「特に組織としてこれといった目的はない。強いて言うなら自己の鍛錬や各自の目的の実現とかかな？イ・ウーは各自の自主性に委ねているんだ」

シャーロックは予想出来ない会話が段々楽しくなってきたのか饒舌になつてきた。

「ただ…組織内は弱肉強食のようになっていっているがね」

「それは面白そうだが…条件がある。俺だけじゃなくレキも入れること、俺たちは2人で1つのチームだ。そして、俺は構わないが絶対にレキに人を殺させない、その二つが条件だ」

レキは海斗の人を殺させないという発言に対して「自分は覚悟が出来ている」と言おうとしたが、海斗に向けられた視線から、有無を感じさせないオーラを感じとり、言つても無駄だと判断し黙つた。

「もちろん、その条件で構わないよ。レキ君に人を殺すような案件は絶対にまわさない事を約束しよう」

「契約成立だ。それで、まずは何をするんだ？」

「今は特にないんだ、準備していることはあるけどね。組織の中での君たち2人は僕の直属の部下の扱いになるから手伝つて欲しい時はこちらから連絡する。指示がない時は2人とも自由にしてもらつて構わないよ。ただ、最初に他の幹部メンバーとの挨拶の

場を設けないといけないね」

（自由にしてもいいのは嬉しいが、幹部との挨拶か…ひと波乱ありそうだ）

「それと言い忘れてたんだが…俺たちは今、そっちが知っている通り、前の組織から抜けたばかりで拠点がない。どうにか出来ないか？ シャーロック・ホームズ」

「僕の事は表向き教 授と呼んでくれないかな？ 個人的な場であればシャーロックでも構わないのだが…一応僕は世間で例の滝で死んだ事になっているからね」

（そっか…普通に受け入れてたけど、こいつはジェイムズ・モリアーティと共に滝に落ちて死んだ事になってるんだったな）

海斗はその事を思い出し、これから何度も呼ぶ事になるであろう呼び方を決めた。

「分かったよ。これからよろしく。教 授」

「…よろしくお願いします。教 授」

「ああ、こちらこそよろしく。海斗、レキ君。そこで君たちの次の拠点なんだが…付いてきたまえ。君たちの次の拠点になる場所に案内しよう」

そう教 授が言うと同時に建物の影に隠れるように止められていた黒塗りのリムジンが動き出し、目の前に停車した。

「さあ、3人共乗りたまえ。パトラ君、今回は手伝ってくれてありがとう。報酬は約束どおりの物を送っておいたから後で確認しておいてくれたまえ」

「うむ、礼は要らん。こちらにもメリツトがあつたから手伝つたのぢや気にするな。こちらは例の報酬さえ貰えればよいからのう」

リムジンから降りてきた運転手が後席座席のドアを開け、プロフェッショナル教授に言われるがまま海斗とレキは、店員のフリをしている女性と共に乗り込んだ。

最後に運転手の人が乗り込むと、パトラは何処かに歩き去り、海斗たちの乗つたりムジンは殆ど揺れを感じさせることもなく動き出した。

「目的地に到着するまで、まだまだ時間に余裕があるから理子君、自己紹介してくれるかな?」

「はい。畏まりました教授」プロフェッショナル

まるでメイドのような言葉遣いと仕草で答えてから、理子という少女は自己紹介を始める前に自分の顔に手をかけた。

どうやら特殊メイクを施したマスクのような物を着けていたようでそれを顔からベリツと剥がしカラーコンタクトを外すと、金色の瞳に綺麗な金髪をツーサイドアップにした、先程までのキリつとした感じの女性の顔とはまったく雰囲気の違い童顔の美少女が現れた。

(なるほど、さっきの姿は変装だったわけか。歳は俺とレキと同じ位かもな)

「私の名前は峰・理子・リュパン4世でえくす♪4世って呼んだら殺すからな。私のこと

は理子って呼んでね♪カイ君、レキユ♪」

自己紹介の途中で軽い感じから一瞬キヤラが変わって一般人なら気絶するレベルの殺気が漏れていたが、海斗もレキも相手が今の所は本当に殺すつもりはないのが分かっていた為、スルーした。

「分かったよ、理子。これからよろしく」

「理子さんよろしくお願います」

それから1時間ほど経った頃、ようやく目的地に到着しリムジンから降りた。

「おい、^{プロフェッショナル}教授。これはどういう事だ？ここが拠点なのか？」

海斗が不思議に思うのも無理はなく、着いた場所は大きな港だった。

ただし、港に停泊している船は1隻もなく、着いた場所は大量のコンテナがあるだけという、とても拠点になりそうな物が何もない場所だったのだ。

「いや、この港ではないよ。もう直ぐ到着するはずだ」

「到着？いったい何が…?!」

海斗は言い終わる前に海面に浮上してきた何かを見て、声には出さなかったが驚愕した。

「まさか、拠点で…潜水艦のことだったのか?!」

「その驚く顔が見たかったんだよ。そう、そのまさかさ！この原子力潜水艦ボストーク

号！こそがイ・ウーの本拠地なんだ。君たちにも基本ここで生活してもらうことになるね」

「マジかよ…」

プロフェッショナル教授の説明によると、このボストーク号と呼ばれる原子力潜水艦は何処からか強奪してきた物であること、船体に書かれた「伊・U」の文字は日本とドイツそれぞれの潜水艦の暗号名を転用していること、核武装もしており、いかなる軍事国家も手出しできないから本拠地には最適ということらしい。

「さあ行くこうか」

「あ、ああ。分かった」

そうして海斗とレキは教授の後に続いてゆっくり歩いていった。

「ようこそ、イ・ウーへ」

プロフェッショナルまるで子供のように教授が楽しそうにそう言ったのを聞きながら、海斗とレキは原

子力潜水艦ボストーク号に乗船した。

第3話 手荒い歓迎

海斗たちがボストーク号に乗船し、1時間ほど経った頃。

二人は教^{プロフェッショナル} 授と共にボストーク号の大広間にいた。

（まさか潜水艦の内装が高級ホテルみたい改造されてるのには驚いたけど、この大広間も大概だな…いったい幾らするのか分からない壺や剣なんかがそこら中に飾ってるうえにかなり広い。教^{プロフェッショナル} 授はここで幹部との顔合わせを行うって言ったけど…一体何人集まるのやら）

続々とやってくるイ・ウーのメンバーを海斗が眺めていると、見た目があきらかに人外の者以外にも様々な身体的特徴や装備をした者達が数個のグループを形勢し、お互いに牽制しあっていることが分かった。

（結構な人数いるがほとんどが各幹部の部下だな。この中で幹部はおそらく2・3人…教^{プロフェッショナル} 授に聞いていた人数より少ない。ここに集まったので全員ではないみたいだ。）

そんな事を考えているうちに、教^{プロフェッショナル} 授の進行によって海斗とレキの紹介が行われようとする、二人の紹介を遮るように幹部の1人が不機嫌な態度を隠さず声を上げた。

「そんなひよろい奴をメンバーに加えるだつて？俺は納得できねえ」

そう言った鬼のような見た目で体の数箇所に目の様な刺青のある人外に賛同するかのように周りも頷いていた。

だが、そうやって2人のメンバー入りに納得出来ない者達が現れることも推理済みだったのか、プロフェッショナル教授はニコニコとした表情を変え、こともなく答える。

「では、どうすれば納得してもらえるかね？ブラド君」

「そりゃあもちろん、俺とそのガキを戦わせろ。そして俺に強さを示せば、納得してやる」

プロフェッショナル教授の言葉を聞いたブラドはニヤリと不敵な笑みを浮かべながら大広間の中央まで行き、そう言い放った。

それを聞いた他の者たちも同意見なのか先ほどと同じように頷いていた。

「彼はああ言っているがどうするかね？海斗君」

「いいですよ、プロフェッショナル教授。なら…ルールはどちらかの降参又は殺害でどうだ？バルドのおっさん」

「ああ、それで構わねえ。ぶつ殺してやるよクソ餓鬼」

「決まりだ。悪いけどレキここは俺に任せてくれ、それと俺の武器預かっててくれないか？」

そう言うのとレキがコクリと頷いたのを見てから海斗は弾切れのヘカートIIとM92

Fを手渡し、ブラドのいる大広間の中央まで歩いていく。

「それでは、審判は公平を期して……そうだね。ジャンヌ君、お願い出来るかな？」

「は、はい。分かりました。——それではこれより、ブラド対里見海斗による決闘を開始します！」

ジャンヌと呼ばれた少女の合図と同時に能力を使ってブラドに向かって海斗は走る。

「ただ足が速い位で武器もねえのにこの俺に勝てるわけねえだろ！」

ブラドは右腕全体を使って勢いよく横合いから殴りつけようとするも、当たる直前に海斗が地面スレスレまで体勢を下げたことにより躲され体勢が大きく崩れる。

その瞬間を狙って海斗は能力で上昇させた腕力に走った勢いも合わせ、ブラドの腹をアッパー気味に殴りつける。

「……………この程度で倒せると思ったかア？」

「チッ！」

一瞬体が数センチとはいえ浮き上がったにもかかわらず、バルドはわずかに息苦しうにしただけで特にダメージは入らなかつたようで、ニヤリと嗤った。

元々この程度では倒せない事は分かっていたが、少しもダメージの入っていない様子に舌打ちをしつつ海斗はすぐさまバックステップで逃れようとするが、それよりもブラドの方が早かった。

「オラアア!!!」

「グハツ!」

とつさに腕をクロスして防御するがブラドの左腕が直撃し、吹き飛ばされた海斗は観戦していた人達を巻き込んで止まった。

（あつぶねえ。いくら能力で肉体が頑丈になつてゐるからつて、あんなのまともに食らつたらさすがに骨折れるぞ…防御が間に合ったのと下がったのが功を奏したな。…さて、どう攻略しよう?）

海斗が攻略法を考えつつ、さつきから下敷きにしたままの人の懐から自動拳銃である「P12」をこっそり拝借し、周りから見えないように懐に隠し、立ち上がろうとすると今度はブラドが走つて肉薄し、勢いよく右腕を振りかぶる。

それは海斗の腹にクリティカルヒットし再び吹き飛ばす。

「ああん?」

だが、殴つた時の感触に違和感をもったブラドは不思議そうに声を漏らす。それもそうだろう。

今度の攻撃は海斗が直撃前にブラドの腕に手を添え、力のかかる方向を反らし、まるで殴り飛ばされたかのような演出をしつつ自分から後ろに飛んだだけなのだから、ダメージはまったく入っていない。

それはある物を確保する為だったのだが、少しでも予想外な事が起こる。

「やべっ?!」

「……………え?」

直前まで誰も居なかったはずの着地予測地点に、運悪く遅れて大広間にやってきた人が入ってしまったいぶつかりそうになったのだ。

その人は茶髪を三つ編みにした絶世の美女と言われてもおかしくないレベルで自分よりは年上であろう女性だったが、ぶつ飛んできた海斗に少し驚き目を見開いただけで難なく受け止めてみせた。

(あれ?この人……………でも、ちようどいい)

「あらら、大丈夫?」

「ええ、大丈夫です。受け止めてくれてありがとうございます。それと……………すみません、少々お借りします」

海斗は礼と同時に謝罪をしつつ女性の後ろに飾ってあった片手剣を鞘ごと紐で背中にくくりつけブラドへと再び向かっていく。

ちなみに海斗が女性に謝罪したのは飾ってあった剣を持っていくことではなく、今右手に持っている物に係る。

「え?……………っ?!いつの間……………まったく気が付かなかったわ」

海斗は隠し持っていたP12を左手に持ち、女性より拝借し右手に持っているピースメーカーと呼ばれる回転式拳銃をブラドの眉間に向ける。

「まさか、あの一瞬でこの私に悟らせずに愛銃を穿なんて…教授が目をつけるだけあつて凄いい子ね」

「パアン!という音と共にピースメーカーの銃口から吐き出された銃弾は、避けることさえしなかつたブラドの眉間を貫いた。

「ゲハハハハッ!その程度の鉛玉が当たったくらいで俺は殺せねえよ!」

「くそっ!FPSなら今の「ヘッドショット!」って表示が出そうなくらい綺麗に当たっただろ!?!:何で死なねえんだよブラドのおっさん!!今のは死んどけよ!」

銃弾は確かに眉間を貫き普通の人間なら致命傷であるはずなのだが、少し仰け反っただけで何ともなさそうにブラドは笑っていた。

それも体内にめり込んだ銃弾さえポトリと排出され傷口は赤黒い煙を上げつつ塞がっていた。

「おいおい、ブラドのおっさん賢者の石でも持つてんじゃねえだろうな?その凄まじい回復能力なんだよ?!メンドクせえなあ!!」

そう言いつつも海斗はパンパンつと両手の銃を何度か撃つが、先ほどと同じように排出されては赤黒い煙とともに傷口がすぐに塞がる。

「そんな豆鉄砲いくら撃つたところで俺には効かねえんだよオ。さっさと降参しねえと死んじまうぞ?」ゲハハハハ!!」

(まあさすがに賢者の石なんて空想上の物があるわけないし、おそらく殺す事は可能：だと思うけど、あの異常な回復速度を上回るには手数も武器も弾薬も足りない。こんな場合、こういう奴の攻略法は限られてくる：俺を侮ってくれてるみたいだし、試しにやってみるか)

一瞬の思考で作戦を決めた海斗はP12の残弾全てをバルドの頭に叩き込み、反動でわずかに上半身のバランスが後ろに傾いた瞬間を狙いピースメーカーで正確に再び眉間を撃ち抜く。

それがトドメとなったバルドは一瞬とはいえ完全にバランスを崩し、体勢を立て直そうと無意識のうちに一歩下がってしまった。

それが致命的な行動になるとは知らずに。

「ハッ! 何度も何度も馬鹿の一つ覚えみたいに撃ちやがって、お前はその程度ってことだ! もう終わりにしてや…ッ?!」

「それはお前だ。馬鹿の一つ覚えみたいに回復能力あてにして避けずに当たってくれてありがとさん」

ブラドが驚くのも無理はないだろう。

海斗はピースメーカーを撃った直後、バルドが体勢を崩し一歩下がりがりきるまでの間に弾切れになったP12を捨て、鞘から黒い両刃の片手剣を抜刀しつつ能力で脚力を上昇させ床がボコツと凹むほどの速度で接近し、すでに目の前にいたのだから。

そのうえ、瞬きする瞬間まで狙われたバルドには海斗が瞬間移動したように見えただろう。

「遅えよ」

そう言つて海斗は掴んでこようとしたバルドの腕に向かって先ほど抜いた両刃の片手剣を能力で上昇させた腕力と移動時の勢いをフルに使い振りかぶると、刃は一時的に音速にも届きそうな速度で何の抵抗もなくスッパリとバルドの片腕を肘先から切り飛ばした。

「グアア!!この程度で…」

「この程度なわけがないだろ?」

そう言つて切り飛ばしたバルドの腕が地面に落ちるよりも早く、もう一方の腕と両足も切り飛ばす。

四肢を切り飛ばされたバルドは背中から地面に倒れこみ、回復するまでとはいえ完全に動けなくなった。

この時バルドは、「俺を動けなくした程度で降伏するとも思っているのか、この程度

の傷なんぞすぐに回復する」と内心ほくそ笑んでいたのだが、ニヤツと嗤った海斗の表情が視界に入った瞬間、これまで戦ってきた中でも体験したことのない程の悪寒を感じた。

「傷は回復出来ても痛みは感じるんだろ?」

「グツ…お前何言つて?」

すると海斗はバルドの回復能力でグロテスクな感じで生えてきた四肢の腱を切ることで動けない状態を維持させつつ、顔や体を刺したり切ったりし続ける。

その光景はもはや拷問であり、周りで観戦していた者達の中には顔を背ける者もいた。

「お前!まさか出血でこの俺が死ぬとも思ってたのか?時間の無駄だぞ?ゲハハハ」

「いや、これでいいんだ。止める気なんてねえよ」

「何?時間の無駄だ!さっさと止めろ!」

バルドが僅かに焦ったような声で叫ぶが無視して海斗は続け、周りで観戦している一部の者たちが「倒せもしないのに何時まで続けるんだ?」プロフェッショナル「教授は何時になったら止めさせるのか?」などと思いを始めた頃、バルドの態度に変化が起こった。

「止めろ!止めろ!グハツ…:止めろって!止めろってんだろが!!」

「止める?…俺はあんたが死ぬか降参するまで止める気はないよ」

無駄などと言っている割には脂汗をダラダラと流し余裕のなさそうなバルドは海斗にそう言い放つが、海斗はその要求をバツサリと一蹴した。

海斗の死ぬまで続ける宣言を聞いて周りで観戦していた者たちは「どうせ勝てるわけない」「時間の無駄」「早く諦めたらいいのに」などと考えていたが当のバルドには死刑宣告のように聞こえていた。

ずっと痛め続けられても回復するから大丈夫と言っててもそれは体だけであり痛みは感じる。

これまでは自分を脅かす存在などほぼいかなかったバルドには手も足も出ない経験などまったく無かった、自分が誰かを拷問にかけて痛めつけることはあっても自分が痛めつけられるなどと思ったことさえ無かったことで無意識の内にこの拷問のようなことが永遠に続くかもしれないという思考に陥り精神的苦痛を更に誘発し、バルドの精神を侵し壊し始めていたのだ。

「止めてくれ！グエ…止めてくれ!!止めてくれ!!」

「止める気はねえって言ってんだろ？」

周りの者達は先程まで強気な態度とついていたバルドが一変して苦しみから逃れる為に懇願し始めたことに驚いたが、それでも海斗がまったく変わらな作業のように切り続けているのを見て戦慄し、ほとんどの者が里見海斗に恐怖を抱いた。

「グア…ハア…止めて、くれ…俺の負けだ！降参する！だから止めてくれ!!」

そうして最後の力を振り絞って出したバルドの声は大広間によく響いた。

その敗北宣言は海斗の計画通りバルドの心がポツキリと折れたことを意味していた。

「うむ、お見事だね。さすが海斗君。さて、ジャンヌ君勝敗は決したからね、合図をしてもらえるかな？」

「え？…す、すみません!!ただいまの勝負！バルドが降伏を宣言した為、ルールに基づき里見海斗の勝利とする！」

勝利宣言を聞いた海斗はポロボロに刃こぼれした片手剣を鞘に収め、能力を解除しながらレキのいる場所へと戻っていった。

観客はバルドが負けたことが信じられないといった表情で啞然とし、大広間は静まり返り、バルドの部下達は血だまりでぶっ倒れているブラドの許へと慌てて駆け寄り治療を始めた。

「海斗さん、お疲れ様です。お見事でした」

「ああ、武器預かってくれてありがとな、レキ。それにしても…二つ名があるからもつと苦戦するかと思っただけ俺のことなめ過ぎで呆気なかったわ」

静まり返っていた大広間の中によく響いた海斗達のやり取りを聞いた者達の一部ではイ・ウーN.O. 2であったバルドの敗北も相まって「あいつを敵に回すのはヤベエ」と

か「出来る限り関わらないようにしよう」などと心に刻んでいた。

それもそのはず、トップである教授プロフェッショナルを除けば実質N.O. 2はイ・ウーの中で幹部であることと同時に最強を意味する。

そのN.O. 2をあつさり倒した力に周りが恐怖を覚えるのも必然だろう。

ただ、一部には海斗にキラキラだかギラギラだかしてそうな目を向けている例外が数名いたりするのだが。

「それでは勝敗も決まったことだし、ここでお開きとしよう」
教授プロフェッショナル

教授がそう宣言すると、ぞろぞろと大広間を出て行く他の者達と同じようにバルドは部下に連れられてあつさり退出していき、海斗とレキ、教授プロフェッショナルの他に1人の女性だけがそこに残った。

そこで海斗は残つてくれている女性へとピースメーカーを返しに行くことにした。

「勝手にお借りしてすみません。でも、これのおかげでバルドに勝つことが出来ました。こちらはお返しします。えつと…」

「気にしないで、スられたことに気がつかなかった私が悪いんだから。色々と良い勉強になったわ。そういえば私、到着遅れたから自己紹介がまだだったわね…ごめんなさい。私の名前はカナよ。よろしく里見君、レキさん」

「俺のことは海斗でいいですよ？カナさん」

「そう？なら海斗君って呼ばせてもらうわね？何か悩みとかこの事で聞きたい事とかあれば遠慮なく聴いてくれればいいわ」

「ありがとうございます。何かあればそうさせてもらいますね」

「ええ、じゃあ私はこの後やることがあるからこの辺でお暇させてもらうわ。それじゃあ海斗君、レキさん、プロフィール教授、失礼します」

そうしてカナは海斗たちに軽く会釈して大広間を出ていった。

「それにしても…本当なら僕の友人を1人紹介しておきたかつたんだけど…彼女は家族か気に入った人物にしか興味がないからね。…近いうちに時間を取って顔合わせに行くからその時はよろしくね2人とも。この後は特に予定してないから好きにしてもらって構わない。特に海斗君は能力を1日中に何度も使ったんだ、部屋に戻ってゆっくり体を休めたまえ」

「分かった。そうさせてもらうよ。行こうかレキ」

「はい。…失礼します」

そう言いながら海斗がレキに向けて手を差し出すとレキは少し恥ずかしそうにしつつもその手を取った。

そうして教プロフィール授に温かい目で見送られながらも海斗はレキの手を引いて大広間から自分達に割り振られた自室へとゆっくり歩いて向かった。